

「受難の主日」

ルカ23・1-49

四旬節の最後の日曜日は、「受難の主日」あるいは「枝の主日」と呼ばれています。ユダヤ人の**過越祭（すぎこしさい）**を間近に控えて、イエス・キリストは、ベトファゲ（ベテパゲ）から口バに乗ってエルサレムの町に入られました。すると大勢の群衆が出迎えました。人々は、「イエス・キリストがダビデ王のように、イスラエルの国を復興させる王としてエルサレムに来られた」と考えました。それで、王様を迎えるために、自分の服やシュロの木の枝を道に敷き、「ダビデの子にホザンナ」と叫びながら、イエス・キリストを歓迎したのです。

ところが、イエス・キリストがエルサレムにおいでになったのは、王様としてではありませんでした。使徒たちに何度も予告していたように、十字架にかけられて、すべての人の身代わりとなって、自分の命をお捧げになるためでした。この御受難の出来事を記念するために、この日の福音では、キリストの受難の出来事について朗読が行われます。

皆さんも体験されていますが全世界はパンデミックに悩まされた3年間でした。私たちはだれも避けることができず、このような恐ろしい状況に陥っています。また、今いくつかの国では、不正な戦争が行われています。これらの戦争では、多くの罪のない人々が、戦争のために苦しみ、死んでいます。それだけではなく、他国や自国に対するひどい不当な差別も引き起こしています。なぜ、このような災害が多いのでしょうか？なぜ、人間がすることはこれほどまでに残酷なのか？何がこのようなことを引き起こすのでしょうか？この状況で、なぜ神は沈黙しているのでしょうか。

この問いを考える時に重要なことはイエス自身が、受難の時、十字架の上で神の沈黙を体験したことです。イエスが、自分のことを見捨てたと思えない神に向かって「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ15.34）と呼びかけています。

イエスが神にといかけて、応答を求めたのは、神の沈黙の背後に、まだ見えない神の計画が必ずあると信じているからです。この絶望したかのようなイエスの言葉は苦難の中で神に信頼する祈りになっています。

「そばに居合わせた人々」の中には、十字架で叫ぶイエスが、エリアに助けを求める哀れな罪人だと見た人々がいました。その人々はイエスの苦痛を長引かせるために「酸いぶどう酒」を飲ませようとしてしました。

しかし、聖書は「そばに居合わせた人々」と同じ動詞を使って、「そばに立っていた」人がいたことを告げています。ローマの兵士をひきいていた百人隊長です。百人隊長にとっては十字架のイエスが別に見えました。百人隊長は「イエスの方を向いて、そばに立って」いました。そして、「本当に、この人は神の子だった」と信仰を告白したのです。

十字架のイエスのそばに同じようにいたとしても、心が遠く離れ別の方向にあるとき、十字架は「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」（1コリント1:23）でしかありません。しかし、イエスの方を向いて、十字架のそばに立つとき、イエスの十字架に神の救いの業を見て取ることができるのです。

神は、イエスの叫びに答えられます。その時大祭司だけが年に一度入ることのできる至聖所の前かけられていた神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたと福音は書きます。イエスの死は、すべての人に神との直接的な交わりを可能にする出来事であることを示しています。神との古い契約ではなく、新しい契約が成就したしるしとなっています。そして、ユダヤ人だけでなく異邦人も神との交わりに招かれることになります。

イエスのエルサレム入城とその十字架の死において、人の心の変わりやすさ 人の世の移ろいやすさが露わにされましたが、それらに信頼を置くことなく、それらに踊らされることなく、神のみ旨に従って、自分に与えられた人生を生きること、ここにイエスが示してくださった、イエスに従う者たちの生き方があります。そのような生き方を支えることができるだけの信仰をいただいていることを感謝しましょう。この世の移ろいやすさ、人の心の移ろいやすさがもたらした十字架の死に打ち勝って復活された主は、わたしたちの中にも信仰の命を吹き入れてくださるのです。そのような信仰の恵みを感謝しましょう。

今日から始まる聖週間、主イエスの十字架の死と復活を祝うために黙想しましょう。復活の喜びにあずかることができるようにともに祈り求めて行きたいと思います。